



日本学士院ニュースレター

2019. 4 No. 23



第13回日韓学術フォーラムを開催

平成30年10月3日から5日まで、東京で第13回日韓学術フォーラムを開催しました。(関連記事9ページ参照)

目次

平成31年度日本学士院賞	2	会員寄稿(野依良治会員)	12
第15回日本学士院学術奨励賞	5	新客員選定	13
新会員選定	8	学士院の歩み	14
本庶 佑会員がノーベル生理学・医学賞を受賞	9	『学問の山なみ』から一歴史をつくった会員	15
第13回日韓学術フォーラム	9	会員・客員の逝去	16
講演会レポート	10	会員の近刊紹介	16
第70回公開講演会のお知らせ	11	編集後記	16

平成31年度日本学士院賞

平成31年3月12日開催の第1127回総会において、日本学士院賞9件9名(うち藤田誠氏に恩賜賞を重ねて授与)を決定しました。第109回となる授賞式は6月に挙行される予定です。

恩賜賞・日本学士院賞

「結晶スポンジ法—X線構造解析の革新と分子科学技術への展開—」

藤田 誠 (ふじた まこと)

東京大学大学院工学系研究科教授、
分子科学研究所特別研究部門卓越教授



CS法の概念図：細孔性錯体（結晶スポンジ）にサンプルを吸収させX線測定を行うと、結晶スポンジ内に捕捉された分子の構造が観測される。

配位結合駆動の自己組織化の研究を基礎に、結晶スポンジ法と呼ぶ「結晶化不要のX線構造解析手法」を創出した。天然物化学や創薬など、微量未知化合物の構造決定を必要とする研究において威力を発揮している。

日本学士院賞

『太平洋戦争期の物資動員計画』

山崎 志郎 (やまざき しろろ)

大妻女子大学社会情報学部教授



編纂した戦時統制資料により、鉄鉱石・食糧などの基礎物資の動員計画と実績を究明し、海上輸送力の激減と軍需への物資配当の集中によって、戦争末期には食糧供給すら困難となり、本土決戦が不可能であったことを明らかにした。



『太平洋戦争期の物資動員計画』
(日本経済評論社、2016年12月)

日本学士院賞

「シガトキシンを始めとする複雑な構造を有する生理活性天然物の全合成研究」

平間 正博 (ひらま まさひろ)

東北大学名誉教授、

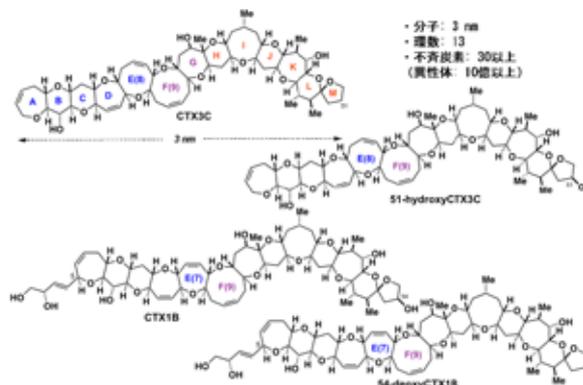
(株)アクロスケール取締役、

大阪府立大学大学院理学系研究科

客員教授



全合成したシガトキシン(CTX)類の構造



世界最大の海産物中毒シガテラの毒素シガトキシンの全合成を達成し、無毒の合成中間体を用いた抗体作成法を開発して高感度毒魚検定法や中毒治療への道を開くなど、他分野や社会にも貢献する天然物合成化学を開拓した。

日本学士院賞

「太陽観測衛星による太陽電磁流体現象の研究」

常田 佐久 (つねた さく)

国立天文台長、自然科学研究機構副機構長



太陽観測衛星「ようこう」・「ひので」の開発を主導し、これまで謎にまつまれていた太陽フレアのメカニズムの解明、コロナ加熱の解明の鍵となる光球における磁気流体波動の発見など、顕著な成果をもたらした。



(左)「ようこう」衛星が軟X線波長で観測した太陽コロナ、(右)「ひので」衛星の捉えた2017年9月10日発生した10年に一度の巨大太陽フレア(軟X線)。(いずれも疑似カラー)

日本学士院賞

「ミュオンラジオグラフィーの開拓と大規模構造体の非破壊的研究」

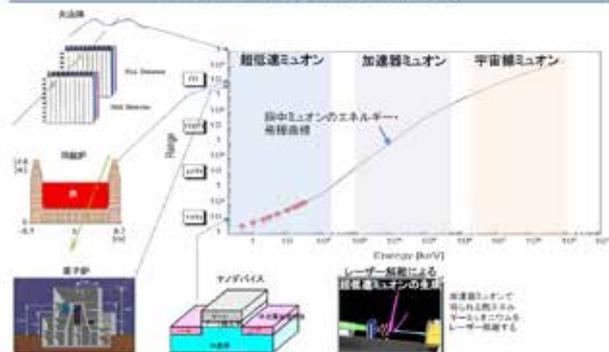
永嶺 謙忠 (ながみね かねただ)

高エネルギー加速器研究機構名誉教授、東京大学名誉教授、理化学研究所名誉研究員、総合研究大学院大学名誉教授、山梨大学客員教授



素粒子ミュオンのビーム生成と利用において独自の研究領域を開拓するとともに、宇宙線として飛来する高エネルギーミュオンを使うラジオグラフィーを創始するなど、ミュオンを用いる学際的科学を総合的に発展させ、ミュオン科学の開拓的研究に多大な貢献をなした。

ミュオンによる内部探索; nmからkmまで
エネルギーと飛程が1対1対応
ナノデバイスから火山体まで



日本学士院賞

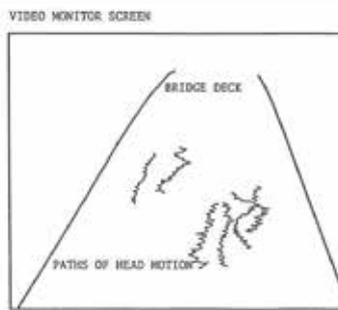
「長大な構造物の振動現象の解明と制御」

藤野 陽三 (ふじの ようぞう)

横浜国立大学先端科学高等研究院上席特別教授、内閣府プログラムディレクター(戦略的イノベーション創造プログラム(SIP))、東京大学名誉教授



橋梁などの長大な構造物に発生する様々な未知の振動現象を、実構造物の計測を通じて発見し、解明した。そして、その制御に関する数々の方式、評価法を提案し、「構造制御学」という新しい分野を国際的に確立させた。



人の歩行の軌跡
ビデオ画像からの歩行者の動きの解析

日本学士院賞

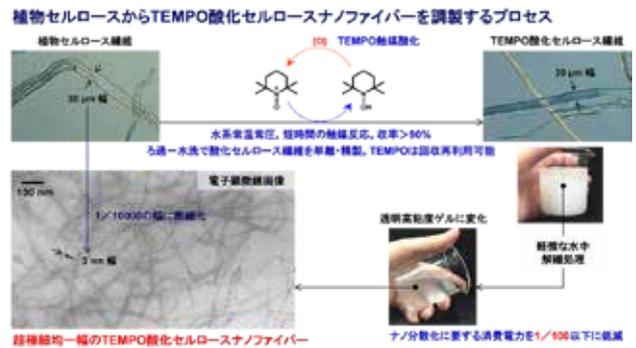
「植物由来の完全分散化セルロースナノファイバーに関する研究」

磯貝 明 (いそがい あきら)

東京大学大学院農学生命科学研究科教授



大気中の炭酸ガス由来の成分として植物中に蓄積されているセルロースを、超極細均一幅の新規バイオ系ナノファイバーに完全分散分散する方法を発見し、植物系ナノテクノロジーの基礎と応用研究の発展に大きく貢献した。



GISS 大気大循環モデルが予測する大気 CO₂ 濃度 640 μmol/mol 到達時の平均気温の上昇（左図）が日本の水稲収量に及ぼす影響の予測（右図）

日本学士院賞

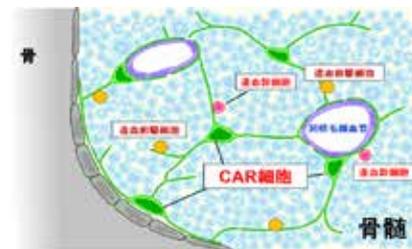
「造血幹細胞と造血、骨を維持する骨髄微小環境の解明」

長澤 丘司 (ながさわ たかし)

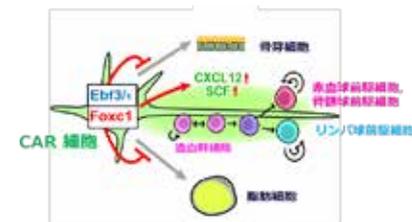
大阪大学大学院生命機能研究科教授、大阪大学大学院医学系研究科教授、大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授、京都大学名誉教授



血液細胞の供給源である造血幹細胞を維持し、血液細胞の産生を支える骨髄の微小環境（幹細胞ニッチ）の実体を解明し、ニッチを構成する細胞が間葉系幹細胞として骨を維持する骨芽細胞や脂肪細胞の供給源となっていることを証明した。



長い細胞突起を持つ CAR 細胞が造血幹・前駆細胞のニッチを構成する。



CAR 細胞は骨芽細胞と脂肪細胞を供給する間葉系幹細胞で、造血幹細胞と造血を維持する。CAR 細胞では、特異的に発現する転

写因子 Foxc1 と Ebf3 が未分化性を維持し、造血に必須のサイトカイン CXCL12 と SCF の産生を促進し、造血幹・前駆細胞の微小環境（ニッチ）を形成・維持する。

日本学士院賞

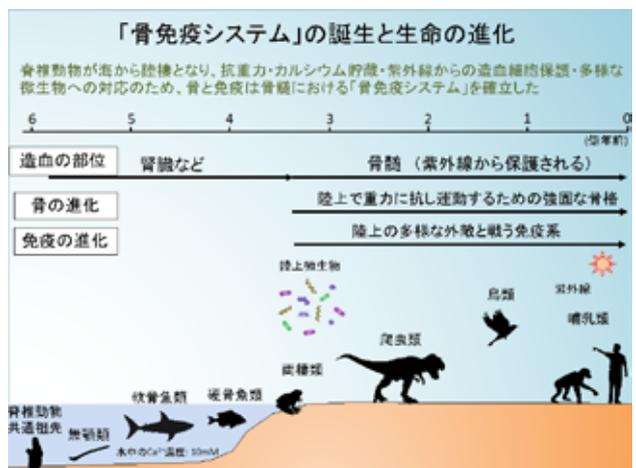
「骨の研究と免疫学の融合を目指す Osteoimmunology の研究」

高柳 広 (たかやなぎ ひろし)

東京大学大学院医学系研究科教授



骨と免疫の相互作用に注目して Osteoimmunology (骨免疫学) と名付ける新規学問領域を創始した。関節リウマチなどの自己免疫疾患および骨粗鬆症・骨転移痛などの骨関節疾患の病態の理解や治療法の開発にも大きく貢献した。



第 15 回日本学士院学術奨励賞

平成 31 年 1 月 15 日開催の第 1125 回総会において、第 15 回日本学士院学術奨励賞の受賞者 6 名を決定しました。2 月 7 日には秋篠宮同妃両殿下ご臨席のもと、日本学術振興会賞と同時に授賞式を挙行了しました。



「ライマン・アルファ放射体を用いた
初期宇宙の観測研究」

大内 正己（おおうち まさみ）

東京大学宇宙線研究所准教授

赤方偏移した水素のライマン・アルファ輝線の観測から、誕生後 10 億年の宇宙にすでに銀河団などの大構造が存在することを発見した。さらに次世代広視野観測装置を用いてこの研究を進め、初期宇宙の姿を明らかにしていく。



「多能性幹細胞を用いたヒト器官原基
による固形臓器の発生・再生研究」

武部 貴則（たけべ たかのり）

東京医科歯科大学統合研究機構教授、シンシナティ小児病院オルガノイドセンター副センター長、シンシナティ小児病院消化器部門・発生生物学部門准教授、横浜市立大学先端医学研究センター特別教授、横浜市立大学コミュニケーション・デザイン・センター長、T-CiRA Joint プログラム研究責任者

iPS 細胞技術を応用してヒトの器官原基を創出することに成功した。器官原基移植という、臓器移植に代わる新たな治療法の開発に向けて意欲的に研究を推進しており、優れた業績をあげている。



「超高速イメージング法・分光法の開発
とその基礎科学・産業・医療への応用」

合田 圭介（ごうだ けいすけ）

東京大学大学院理学系研究科教授

従来のイメージング法の限界を超える空間的かつ時間的により高分解能を可能にするレーザー光を駆使した超高速イメージング法を開発し、物理現象から生物・医療応用まで、多岐にわたるユニークな研究の礎を築いた。



「エアロゾル気候モデルの開発とその
気候変動および黄砂・PM 2.5 分布予
測などの大気環境研究への適用」

竹村 俊彦（たけむら としひこ）

九州大学応用力学研究所教授

土壌粒子、硫酸塩粒子、炭素粒子、PM 2.5 などのエアロゾルを統合的にシミュレーションするモデルを開発した。このモデルにより、地球全体におけるエアロゾルの濃度分布や気候に対する影響を明らかにした。



「マッチングあるいは市場設計（マー
ケットデザイン）理論の現実への応用
可能性の拡張」

小島 武仁（こじま ふひと）

スタンフォード大学経済学部准教授

価格が付けられない物や人の配分の仕組みを設計するマッチング理論において、既存の理論を革新的に修正し、現実に応用力の高い理論を精緻に構築した。若くして、この分野の研究の国際的なリーダーとなっている。



「古代エジプトの柱の編年史ならびに
建築哲学の研究」

安岡 義文（やすおか よしふみ）

日本学術振興会特別研究員－S P D

古代エジプトの柱の様式と編年、柱やその装飾の象徴的意味、柱の設計法や施工法、柱に反映された古代エジプト人の宗教観や歴史観を解明して、建築を中心とする古代地中海文明研究のための確固とした土台を構築した。

日本学士院学術奨励賞・日本学術振興会賞授賞式（平成 31 年 2 月 7 日）



選考経過を報告する江頭憲治郎委員長



賞状及び賞牌を授与される受賞者（武部貴則氏）



受賞者を代表して挨拶を行う大内正己氏



式後、秋篠宮同妃両殿下と懇談する受賞者（大内正己氏）

<学術奨励賞受賞者寄稿>

「宇宙進化の謎に挑んだ 20 年間」 東京大学宇宙線研究所准教授 大内 正己

宇宙は 138 億年前にビッグバンで始まり、長い時間をかけて現在の宇宙へ進化したと考えられています。ビッグバンが起こった頃の宇宙は高温高密度で、星どころか、原子すら存在しませんでした。現在の宇宙には私たち生命を育む地球や太陽、そして銀河といった豊かな構造が存在します。私は、このような宇宙の進化をすばる望遠鏡などで調べています。

すばる望遠鏡は、20 年前に先人たちの多大なる努力の上に完成しました。ちょうど私が大学院に入学した年のことです。我が国で初めて導入された大型光学望遠鏡でしたが、既に同様の望遠鏡を持つ欧米諸国から見ると約 10 年遅れの出発でした。「今さらすばる望遠鏡 1 台で何をやるのか？」と悲観的に考える研究者も多くいました。心折れそうになりながらも、すばる望遠鏡完成前の日本では行えなかった宇宙進化の研究を私は選び、手探りで研究を始めました。130 億年前の古代の宇宙から発せられた光を、広い範囲で観測し、どのように宇宙が形作られたかを調べました。その結果、古代の宇宙にも、今と同じような星や銀河が織りなす大規模構造があることが分かりました。さらに、この中で巨大な天体を見つけました。この天体は、日本のすばる望遠鏡の探査天域で見つかり、古代の宇宙にあり、際立つ存在でありながら謎に包まれているため、いにしへの女王卑弥呼にちな

みヒミコと名付けました。古代の宇宙にも現在の宇宙と同じような大規模構造があり、ヒミコのような巨大な天体があることから、宇宙は早い時期に構造を作り進化を遂げたことが分かりました。

私は、研究結果を論文にまとめ、学術誌に次々と発表しましたが、日本の無名の著者の論文を積極的に引用する欧米研究者はほぼ皆無でした。それでも、研究結果を手一人で国際会議に乗り込み、まるで道場破りのように欧米の研究機関を行脚して自身の研究を知ってもらおうとしました。当初は、「信じられない」と懐疑的だった欧米の研究者たちとも深く議論を交わし、彼（女）ら自身の研究でも結果が確認されて、私の研究が少しずつ受け入れられていきました。

先月、訪日したドイツ人の若手研究者から「指導教員に勧められて、大学院入学後初めて読んだ論文があなたの論文 Ouchi et al. (2008) だった。今でもこの論文を机の上に置いて研究中によく見る」と言われ、私の研究が世界で受け入れられていることを実感しました。日本発のオリジナルで、人々に感動してもらえる研究を目指したこの 20 年間の努力が実を結びつつあることを喜びながら、日本、そして世界の若手研究者をリードしてさらなる宇宙の謎に挑もうと決意を新たにしています。

「マッチング理論により社会問題の解決に挑戦する」 スタンフォード大学経済学部准教授 小島 武仁

経済学というとお金についての学問だというイメージがあるかもしれないが、経済学部の教員である私の研究にはお金がほとんど出てこない。私の専門分野は「マッチング理論」と呼ばれる人やモノ・サービスをどうくっつけるかを研究する分野であり、特に価格によるいわゆる「見えざる手」が働きにくい状況で、代わりに一定の手続き（アルゴリズム）を使った、いわば「見える手」による制度設計がテーマである。この理論は様々な現実問題に応用されていて、例えば地方自治体が主催する学校選択制度などがある。学校選択制で各学校への入学者を決めるアルゴリズムをどう設計すれば、なるべく多くの学生の希望が叶うのかと言った問題を考えるのだ。

私の所属はアメリカだが、日本の社会問題には興味を強く持っている。実のところ、日本の制度には興味深いものが多く、研究のインスピレーションになっている。例えば日本では研修医を研修病院に配属するために諸外国と似たアルゴリズムを使っているのだが、研修医の都市部への一極集中を防ぐ目的で、都道府県別の研修医数

に上限を設定して運用している。私の研究ではこの仕組みでは過剰なアンマッチなどの無駄が生まれることを発見し、都道府県別上限を守りながらマッチングを改善するアルゴリズムを提案した。

最近では保育園の問題を分析した。保育園不足は未だ厳しい問題だが、人気保育園であっても、ある年齢の定員は埋まっているが他の年齢の定員は余っているケースがよくある。こうしたミスマッチに対応するために追加募集などを行っている自治体もあるが、現状では後追的な政策になっている。私の研究ではこうしたミスマッチを防ぐ新方式を開発し、日本の自治体にいただいたデータを使い新方式の効果を測定した。

日本社会には数多くの問題が山積しているが、私はそれを嘆くのではなく、やりがいのあるチャレンジだと捉えるようにしている。我々研究者が貢献できることはたくさんあり、研究者と社会の良い協働が進むことを願っている。

「ぶれ」の思考と「ずれ」のマネジメント 東京医科歯科大学統合研究機構教授 武部 貴則

医学部在学中、憧れの職であった医師たちの講義を聞く中、さまざまな疾患に対しての理解が限定的であることが次々と紹介され、圧倒的な敗北感を感じた。そんなある日、故・日野原重明先生の講演で、社会を前進させるような大きな医学的発見は予期せぬ偶然（セレンディピティ）としてもたらされることが多い、と耳にしてから研究への興味が強まった。しかし、今もなお病に苦しみ、対処ができない患者さんが山のようにいることを考えると、運や偶然に任せるわけにはいかない。たった一人の浅学な若者に何ができるのだろうか、と自問自答の日々を送ってきた今、現時点での結論として「ぶれ」と「ずれ」の概念の重要性を挙げたい。

数年前、2013年のノーベル生理学・医学賞を受賞した Thomas・Südhof 先生の講演を拝聴した。聴衆から発見の原動力は？と尋ねられ、放射状に、複層的に考える、ラディアル・シンキング（radial thinking）の重要性を話されていた。テキサス大時代に異なった専門家たちから全く違ったインプットをシャワーのように浴びせかけられたことが研究を飛躍させる原動力になったとい

うのだ。いわば、「ぶれ」の思考法である。

私が、2011年ごろ本賞を受賞するに至ったミニ臓器が作られる研究の原型となる現象を見出した際に役立つのも、「ぶれ」を駆使した研究展開であったように思う。最初に現象を発見した際、何のバックグラウンドもない私にとっては、「ぶれ」が必然であり、あらゆる教科書や論文を読みあさる中、生物学、物理学、化学などさまざまな異分野の専門家に現象を見てもらったことが原理解明に極めて役立った。

一方、研究室主宰者になったいま、「ずれ」の人的マネジメントの大切さを日々実感している。各々の研究者には、向き不向き、得手不得手、専門不専門があるが、これらは研究者間の掛け合わせをマネジメントすることによって、補うどころか、予測し得ない相互作用が生じることがある。私が持つ複数の所属には、組織・文化的にすべて「ずれ」を持った研究仲間が沢山在籍しており、それらのずれが新たな創造的研究につながっている。

本賞をきっかけに、微力ながら本邦の科学振興に貢献できるようチームとともに精進していきたい。

新会員選定

平成30年12月12日開催の第1124回総会において、日本学士院法第3条に基づき、次の9名を新たに日本学士院会員として選定しました。



深沢 克己 (ふかさわ かつみ)

第1部第1分科

専門分野：西洋史学

現職：京都産業大学文化学部客員教授、東京大学名誉教授

ヨーロッパ経済発展を国際商業史の視点から照射し、我が国の西洋近世史研究に革新をもたらすとともに、フランスを中心とする港湾都市史・宗教社会史・フリーメイソン史の研究領域を開拓し、それぞれの分野で新生面を開いた。



松浦 純 (まつうら じゅん)

第1部第1分科

専門分野：ドイツ文学

現職：東京大学名誉教授

独文の主著『マルティン・ルター：エルフルト期注記集 1509-1510/11』

によってルター最初期の現存全資料の研究の基礎を築き直したことをはじめとし、ドイツ語を用いた論考により国際的にも高い評価を得ている。



伊藤 邦武 (いとう くにたけ)

第1部第1分科

専門分野：哲学

現職：龍谷大学文学部教授、京都大学名誉教授

近現代哲学の主要な潮流であるアメリカ・プラグマティズム、及びそれに呼応するヨーロッパとりわけフランスの認識論の理論と歴史を考究することを通じて、科学的な実証性と形而上学的な思弁性の総合、あるいは人間の認識と行為において合理的な信念が果たす役割といった哲学上の重要問題に新たな光を当てた。



根岸 哲 (ねぎし あきら)

第1部第2分科

専門分野：経済法

現職：神戸大学社会システムイノベーションセンター特命教授、神戸大学名誉教授、甲南大学名誉教授

独占禁止法を中心に、経済法の各分野を広くかつ深く研究し、独自の特色を備えた法の一部門として経済法を確立させる上で、主導的な役割を果たした。また、経済学の知見を積極的に活用し、民法など隣接部門の法領域と研究を交流させた。



中山 信弘 (なかやま のぶひろ)

第1部第2分科

専門分野：知的財産法

現職：東京大学名誉教授、弁護士（西村あさひ法律事務所オブカウンセル）

著作物の概念が大きな変容を被るなどの激しい変化の中で、知的財産法の解釈および制度見直しの方向を提示するとともに、知的財産法を財産的情報の保護法として私法体系の中に位置づけ、同法の理論的基礎を提供した。



大塚 啓二郎 (おおつか けいじろう)

第1部第3分科

専門分野：開発経済学

現職：神戸大学社会システムイノベーションセンター特命教授、日本貿易振興機構アジア経済研究所 上席主任調査研究員、神戸大学大学院経済学研究科特命教授

アジア及びアフリカを中心として調査・分析をする開発経済学者として、緑の革命・土地制度・貧困と教育・工業化と産業集積を含む広い領域において国際的に評価の高い研究業績を挙げ、関連する国際学会・研究機関で中心的な役割を果たしてきた。



大隅 良典 (おおすみ よしのり)

第2部第4分科

専門分野：分子細胞生物学

現職：東京工業大学科学技術創成研究院特任教授

細胞が自身のタンパク質やオルガネラを分解するしくみ「オートファジー」の分子機構を明らかにした。オートファジーは、生命を維持するための種々の重要な過程に関わっており、生命科学や医学の進歩に大きく貢献した。



鈴木 啓介 (すずき けいすけ)

第2部第4分科

専門分野：有機合成化学

現職：東京工業大学理学院教授

複合糖質化合物や抗生物質など、生理活性天然有機化合物の全合成研究を行った。多数の官能基や不斉中心を持つ複雑な構造を構築するため、基礎的な有機合成反応や斬新な合成経路を案出し、数々の全合成を達成した。



丸山 利輔 (まるやま としすけ)

第2部第6分科

専門分野：農業農村工学

現職：石川県参与 (県立大学担当)、
京都大学名誉教授

耕地や林地では、用水の確保と排除がその営みの重要な要素である。そこで、水の流れの2つの要因、蒸発散と流出について灌漑排水学の立場から研究を行い、主要河川の流域全体における用水の需要と供給を体系的に分析し、その循環利用の方策を立案した。

本庶 佑会員がノーベル生理学・医学賞受賞

平成30年10月1日、第7分科の本庶 佑会員 (医化学・分子免疫学専攻) がジェームズ・P・アリソン氏とともにノーベル生理学・医学賞を受賞することがスウェーデンのカロリンスカ研究所より発表され、12月10日、授賞式が行われました。受賞理由は、「負の免疫調節作用の阻害によるがん療法の発見」です。本庶会員は免疫細胞上に免疫のブレーキとして働くPD-1と呼ばれるたんぱく質を発見し、そのPD-1の免疫抑制機能ががん治療にも応用できることを見いだしました。この発見に基づく免疫チェックポイント阻害療法と呼ばれるがん治療法は著しく効果があることが証明され、今回の受賞につながりました。



第13回日韓学術フォーラム

大韓民国学術院との共同事業として始まった日韓学術フォーラムは、第13回を迎え、平成30年10月3日 (水)

～10月5日 (金)の3日間、東京で開催されました。フォーラムには大韓民国学術院から金東基会長を始め15名の会員等が来日し、本院会員及び報告に関わる分野の研究者等を合わせて約45名が参加しました。

大韓民国学術院会員等は来日後、東京大学総合研究博物館を訪問し、その後学士院を訪問、学士院役員等と和やかに歓談し、旧交を温めました。翌10月4日 (木)には、学士会館 (神田) を会場として、4名の会員から次のように報告があり、その後、日韓両国会員等の間で意見交換が行われました。

報告1：江頭憲治郎会員 (日本学士院会員、商法)

「日本のコーポレート・ガバナンスの特徴」

報告2：鄭東潤 (CHUNG, Dong-Yoon) 会員 (大韓民国学術院会員、商法 (企業法)・民事訴訟法)

「韓国の企業形態—知識産業時代の新たな企業類型の需要について—」

報告3：鈴木邦彦会員 (日本学士院会員、神経化学・神経内科・遺伝性神経疾患)

「脳を侵す乳幼児の遺伝性疾患：何が判ったのか？何が出来るのか？今後の課題は？」

報告4：申喜燮 (SHIN, Hee-Sup) 会員 (大韓民国学術院会員、遺伝学・神経科学)

「共感恐怖 (empathy fear) の脳科学」

最終日の10月5日 (金)には、大韓民国学術院会員等は、すみだ北斎美術館を訪問しました。



報告する江頭憲治郎会員



報告後の意見交換

講演会レポート

本院主催により、以下の講演会を開催しました。

1. 第69回公開講演会

開催日 平成30年10月27日(土)

会場 日本学士院会館

佐藤彰一会員が「歴史の語りと意味—『モン・サン・ミシエルのアリストテレス』論争とその後—」、堀川清司会員が「『海岸工学』—私の終生の研究課題—」と題して講演を行いました。

佐藤会員は、フランスで出版された1冊の歴史書が歴史学の枠を超えて社会的な論争を引き起こした経緯とその意味についてわかりやすく説明しました。また、堀川会員は、自身が学生のときに1953年の台風災害が起き、それをきっかけに研究の道に入ったこと、その頃にアメリカで海岸工学という学問が成立し、自身が関わってその後発展し一つの学問分野が確立していったことを説明しました。聴講者は熱心に聞き入り、質疑応答も活発に行われました。聴講者からは、佐藤会員の講演に対し「西洋中世史は自分の最も知識の無い分野だったが、ギリシャ文明と西洋文明、イスラム文明の関連について教えられるところが大きかったと感謝している」「通説だからとむやみに信じてはいけなかったことがわかった」、堀川会員の講演に対し「苦勞に満ちた学問生活を送られたことがわかった。日本の海岸工学の課題が何であったかや、学問分野としてどう展開されるべきかについて、先生の若手の研究者への思いも含め、考えさせられた」「国土保全のためには、海岸工学の分野が発展することや後の世代を築く人材の育成が重要であることがよくわかった」などの意見が寄せられました。



佐藤彰一会員



堀川清司会員

2. 学びのススメシリーズ講演会

「機械翻訳の話」

開催日 平成30年12月8日(土)

会場 日本学士院会館

本講演会は、将来を担う中学生・高校生に、学問への憧憬を抱かせることを目的として計画され、今回は第11回開催となりました。

講師の長尾 真会員は、自身の専門の情報学の観点から、コンピュータを使った機械翻訳の仕組みを解説しました。また、終了後は国立研究開発法人情報通信研究機構(NICT)のご協力を得てタブレット端末での機械翻訳の実演が行われ、その後、参加者が実際に端末を手にとって機械翻訳を体験しました。

聴講者からは、「現在の機械翻訳の動向と基本的な翻訳ルール、今後の課題である感情の扱い方など、過去から現在、未来に至る話が聞けて、知的好奇心を刺激された良い講演だった」「講演では日本語の「の」や「出る」の様々な用例が紹介されたが、機械翻訳がそうした用例を学習し、文法規則を超えた意味や、話者のメンタリティーまでもくみ取れるレベルを目指していることを知り驚いた」「機械翻訳のシステムを知ることで、逆に英語を学ぶために必要なものは何か、何に重点を置いて学習したら良いのか分かった。単語の丸暗記、文法を必死で覚えることも大切だが、その中で多くの用例や使い方の違いに注目すべきだと気づかされた」「機械翻訳が発展しても外国語を学ぶ大切さは減じないと聞き安心した。これから東京オリンピック・パラリンピックに向けて機械翻訳技術に大いに期待したい」などの意見が寄せられました。



講演を行う長尾 真会員



講演後行われた機械翻訳のデモンストレーション

第70回公開講演会のお知らせ

2019年5月18日(土)、第70回公開講演会をITビジネスプラザ武蔵(石川県金沢市)において開催します。岩井克人会員が「貨幣論から見た、ビットコインの将来、資本主義の将来」、別府輝彦会員が「発酵を通して見る「見えない巨人」・微生物」という題目でそれぞれ講演を行います。

共催：金沢大学

《開催日時》

2019年5月18日(土) 午後1時～4時10分

《会場》

ITビジネスプラザ武蔵 6階ホール

〒920-0855 石川県金沢市武蔵町1-4番3-1号

《申込方法》

日本学士院ホームページの専用フォームから、またはメール(gkkouen@mext.go.jp)、FAX(03-3822-2105)、往復はがきのいずれかの方法で必要事項を記入の上、お申込みください。(入場無料、定員140名、先着順)

《必要事項》

氏名(ふりがな)、住所、電話番号等連絡先

《申込・問合せ先》

日本学士院公開講演会係

(〒110-0007 東京都台東区上野公園7-32)

TEL: 03-3822-2101 FAX: 03-3822-2105

e-mail: gkkouen@mext.go.jp

http://www.japan-acad.go.jp/

貨幣論から見た、ビットコインの将来、資本主義の将来

岩井克人

(日本学士院会員・国際基督教大学特別招聘教授・
東京大学名誉教授)

ビットコインと呼ばれる仮想通貨に多くの人々の関心が集まっています。ビットコインは貨幣となるのか？ビットコインは新しい貨幣なのか？ビットコインの普及は貨幣のない社会を招来するのか？仮にビットコインが世界中で貨幣として流通することになったら、資本主義はどのようなものになるのか？など、さまざま問かけがなされています。この講演会では、『貨幣論』の基礎に戻って、これらの問いに答えてみるつもりです。そして、その答えを通じて、私たちが生きている資本主義という社会が、究極的に何によって支えられているかも考えてみようと思っています。

発酵を通して見る「見えない巨人」・微生物

別府輝彦

(日本学士院会員・東京大学名誉教授)

身近な発酵の中に、微生物についての昔の人の智慧と最新の科学技術の両方を見ることができます。わが国の酒造りの主役であるコウジカビは、世界の農産物を汚染している危険な毒素をつくるカビを、私たちの祖先が無毒化したものです。チーズ造りに不可欠な子牛胃袋の酵素を微生物につくらせる遺伝子組換え技術は、アフリカの農村にラクダ乳の新しい利用の道を開こうとしています。

いまでは驚くほど多様な有用物質をつくり出す発酵産業を支えてきたのは、19世紀末に始まる純粋培養をもとにした微生物学ですが、最近登場したDNAを通して微生物を見る新しい手法は、地球上で最大の生物として生命圏全体を支える、「見えない巨人」ともいえる微生物の新しい姿を明らかにし始めました。発酵の研究を通してかいま見たその姿と、これからの展望について話します。

(会員寄稿)

我が国の学術論文出版の現状を憂える

野依 良治 会員
(有機化学専攻)



昭和13年兵庫県生まれ。京都大学大学院工学研究科修士課程修了。工学博士。名古屋大学理学研究科教授、理化学研究所理事長などを歴任。現在は名古屋大学特別教授、科学技術振興機構研究開発戦略センター長。ローマ法王庁科学アカデミー会員、全米科学アカデミー、英国王立協会、中国科学院などの外国人会員に選出。文化勲章受章、ノーベル化学賞受賞。平成14年より日本学士院会員、現在、日本学士院第2部部長。

学術は文明社会共通の知的資産をつくるためにある。かつては精神の高揚を旨とし、実利には距離を置くアカデミーの中で個人的に思想や知見を交換してきた。やがて自然科学、人文学、社会科学を問わずその普遍性ゆえに国境をはじめ、さまざまな境界を越えて自由に知識の交換ができる場が求められ、学協会を中心とする学術誌が大きな役割を果たしてきた。そして今や知識は学術界のみならず、国家政策目標の実現を担う国立研究所、さらに産業経済界でも生産される。しかし、学術の価値観が揺れ、社会的得失が交錯する中で公正かつ開かれた「思想の自律的表現の場」が損なわれつつあることを懸念している。

我が国において、独自の思想や包括的見識を尊重する人文学や社会科学の分野では、総じて日本語による「書籍(monograph)主義」が一般的であるように見える。一方、個々の事象認識を重んじ世界的な競争環境にある自然科学界では「論文主義」、多くは比較的短い英文の“progress report”を積み上げていく。そして社会との関わりを増す中で、公的財政支援による活動の証として論文発表を求められている。研究者に対する主たる評価指標であり、研究費獲得の成否などにもかかわるといふ。

本来、評価はその目的に応じて、評価者自らが多様な観点から主観的になすべきであるが、自然科学界では公平を期すとして論文数とともに、専門集団迎合的な論文被引用回数を「代理指標」として用いる傾向にある。精神的な営みである学術に安直かつ一元的な数値分析は馴染まないが、この風潮を助長するのが学界を席卷する欧米の商業的科学論文出版社と論文情報提供企業の存在である。当事者である研究社会自身、また「分かりやすさ」を求める周辺社会もこのご託宣を追認する。だがこの「信仰」の根拠は何か。そもそも公的な学術活動評価が営利目的の機関に過度に依存すれば、知を創る若者たちの動機や価値観が歪むではないか。

自然科学界は商業的出版社の戦略的要求に応えるよ

うに仕向けられているように見える。とくに論文採択率が10%未満のブランド誌は有名劇場や競技場と同じく、若い人を魅きつけ特定の課題と研究者に存在感を与える。その創意工夫は多とすべきであろう。しかし、例えばかつてノーベル化学賞をもたらす本当の端緒となった発見の多くは、地味な専門誌に特に飾ることもなく謙虚な形で、ときには英語でない母国語でさえ発表されてきた。独創的科学研究の原点は好奇心に基づく自学自習であり、真価はしばしば論文誌名や被引用回数と無関係である。

さて、我が国の学問は主体性を維持できているだろうか。政治や経済にとどまらず、学問の情報発信は国際的に大きな影響を及ぼす。国立国会図書館には「真理がわれらを自由にする」の銘文が刻まれているが、また「歴史は勝者によって記述される」とも言われる。「真理」がいかなる手続きを経て、どこに記述され世界にいかんにか伝えられるかは、決して看過できない。

科学に国境はなく、研究成果は広く公正に評価され共感を得て共有されるはずである。しかし、知の創造はしばしば母語に基づく背景から生まれ、価値観を異にする研究者たちは自ずと主観的に説を唱える。これが豊かな多様性の源である。もしもこの情報化時代に、人文学、社会科学に限らず自然科学においても、価値評価が外国の出版社、審査員の判断に偏り続ければ、日本独自の学問的思考は少なからず制約される恐れがある。この「英語の世紀」に我が国が科学立国として主体性を担保しつつ、諸外国に伍して生きるには、世界から信頼され影響力をもつ英文科学論文誌の発行が不可欠である。

現行の科学論文公表の仕組みは甚だ理不尽であり、各国とも論文誌価格の高騰が学術活動に影を落としている。問題の原点は科学社会の特殊構造と自治能力の喪失にある。世界的に活動が拡大する時代に、研究界と周辺が質の維持に配慮することなく年間二百数十万報にのぼる論文生産を放置し、成果の合理的発信のための財政的、人的要素の「内部化」の担保も怠ってきた。

市場の独善的価値観に統治を委ねれば研究教育体制の破綻を招くことは必然である。

学術研究成果の主要部分は、各国政府による膨大な人件費、施設費、研究費等の負担の結果である。成果出版作業における投稿論文執筆、受理論文の査読にかかる費用も国を超えて専門研究者たちの所属機関の俸給でまかなわれる。一般書籍、雑誌とは異なり掲載論文に対する原稿料は皆無で、そのうえ著作権や基本データは出版社にとどまる。出版社は論文誌発行の諸経費の回収、収益確保を図るが、商業誌であろうとも書店販売ではなく、もともとの知識を生産する研究組織や研究者自身の定期購読料でまかなう。

かくして科学技術医学分野の情報プラットフォーム企業は高度な電子化技術を駆使し、また科学界の拡張性、競争主義、研究評価制度などと呼応して事業性をあげてきた。250億ドルを超える市場を寡占する主要企業の利益率は極めて高い。米英以外の非営利学会誌は商業誌に対抗できず、その結果、高騰を続ける図書費が大学などの慢性的財政圧迫を招いている。

自ら商品価格を設定する出版社とのパッケージ契約を通して多数の科学誌を購読できる研究機関は限られ、情報環境に大きな格差が生じている。もとより個人は疎外される。米国議会は科学研究の本来の目的に鑑み「公的資金支援による研究の成果は、すべての国民に無料で公開すべし」とオープンアクセスの義務付けを主張した。この政治的正論に乗じた新たな倫理的問題が生じているが、賛同する欧米の財団、研究費配分機構

は多く、個々の論文著者による30-50万円程度の出版費用負担で、論文出版後の早期の電子版公開を促している。

近年のインターネットの発展は技術的に「開かれた意見交換の場」を可能にした。そして現行の論文投稿、第三者査読、編集者判断を経る情報発信制度の健全性の揺らぎとともに、特定情報組織における研究者の自己責任による未公表論文 (preprint) のオンライン公開も始まった。科学界は「表現の自由」と「信頼性の保証」の相克を超えて、秩序ある知識集積の仕組みを維持しなければならない。

科学立国日本の学術の健全な発展には自前の情報発信、受信基盤が不可欠である。個人的に世界に通用する研究者は多いが、残念ながら国全体として諸外国と競争的、協調的に対等に知識交換する環境が用意されていない。我が国の科学論文生産量の世界シェアは6%程度、科学研究費による成果の海外論文発表率は80%以上とされるが、国内に相応の国際出版事業がなければ情動的、経済的均衡は得られない。我が国の学術誌の存在感はあまりに乏しく、この非対称性は学術を支援する一般社会に対して説明不能である。指導的大学の恣意的自由にかまけた社会的使命の認識不足、さらに成果公開を担う学協会と言論出版企業の無気力な内向性と人材不足、高度情報技術と知識資本国際戦略の欠如によるものである。筆者も自らの無力を反省しつつ、我が国の学術の自律と自立のために叡知を結集せねばならないと考えている。

新客員選定

平成31年3月12日開催の第1127回総会において、日本学士院法第6条に基づき、わが国における学術の発達に関し特別に功勞のあった外国人として白春礼博士を新たに日本学士院客員に選定しました。



氏名 白 春礼
(BAI, Chunli)
現職 中国科学院院長
出生地 中華人民共和国
専攻学科 物質材料科学
(Material Science)

白春礼博士は、導電性高分子の広域 X 線吸収微細構造、走査型プローブ顕微鏡、一分子や分子ナノ構造、自己集合体、分子ナノデバイス、新規ナノ材料などの研究課題

について優れた成果をあげてきました。特に、数多くの新しい技術と方法論を開拓しつつ、分子・物質材料科学への応用を図り、この分野の発展に顕著な貢献をしてきました。

同博士はアジアを代表する科学者の一人ですが、かつて東北大学に客員教授として滞在して以来、多くの日本人の知己を得て我が国の科学技術界との絆を強めました。また中国科学院院長に就任後は基礎科学、物質材料科学・工学分野における日中間の研究機関連携、共同研究や若手研究者の交流を積極的に推進してきました。

学士院の歩み 第15回 『東京学士会院雑誌』と欧文紀要の創刊

日本学士院は、明治6(1873)年に結成された近代的啓蒙学術団体である明六社を源流として明治12(1879)年に創設された東京学士会院を前身とします。東京学士会院は、明治39(1906)年に帝国学士院に改組し、昭和31(1956)年に現在の日本学士院となりました。このコーナーでは、140年を超える本院の歴史についてシリーズで紹介いたします。

日本学士院が2ヶ月の休会を除き、毎月1回の例会を開くことは創設以来現在に至るまでの恒例である。例会には会員が全国から集まり、会員の選定や授賞の審査、その他学士院の運営に必要な諸議事が行われる。例会では必ず、会員の研究発表または会員外の研究の紹介が行われ、これらの研究は本院の発行する紀要に掲載される。

明治12(1879)年1月に日本学士院の前身の東京学士会院が創設された後、4月28日に開催された臨時会で、「各員の講談演説及筆記等は別に之を印刷し、東京学士会院雑誌(誌の誤)と題して^{ほつだ}発兌(発行の意)すべきに決議す」との議決が行われ、『東京学士会院雑誌』が創刊された。第1冊は6月に刊行され、福沢諭吉会員の「教育論」を掲載した。体裁は四六判15ページ、定価は5銭であった。丸屋善七に出版並びに販売を委任した(その後、出版元は変遷した)が、刊行毎に一定部数の上納を命じ、これを諸官庁、宮内省、各府県、学校、学会、図書館などに頒布した。

これとは別に、毎月の記事の中から外部に公示すべきものは新聞に掲載したほか、『東京学士会院紀事略』と称して、同院関係者その他に頒布されたが、明治13(1880)年2月からは『東京学士会院雑誌』の巻末に掲載した。

『東京学士会院雑誌』は発刊以降、ほぼ毎月刊行されたが、原稿の関係から毎月の刊行が困難となったため、一時隔月刊行となり、その後毎月の刊行に復した。しかし、ついに明治34(1901)年5月には廃刊を決し、東洋学芸社の『東洋学芸雑誌』に特別の一覧を設け、講演の速記、例会の記事などを掲載することとした。『東京学士会院雑誌』として出版されたのは23編であった。

明治39(1909)年6月に帝国学士院規程が公布され、東京学士会院は帝国学士院に改組した。規程第7条には「帝国学士院は専攻の学科に付き論文を提出し又は報告を為すものとす」と定められた。また論文の印刷発行については、同年7月、帝国学士院第1回総会で可決された帝国学士院会則に「帝国学士院規程第七条の論文の提

出及報告は總會又は部会に於て之を為すべし／論文及び報告は之を印刷して学者学会学校に配布することあるべし」と定めた。

同年11月の第2部部会において、長岡半太郎会員(物理学)は次のように発言した。長くなるが引用する。「(前略)学士院と云うものは日本の学問を代表する1つの団体であろうと思います。然るに其学士院の仕事として何が是までありましたか。(中略)学士院が唯形式にのみ止まると云うことでは誠に恥かしい次第でありますから、欧米のアカデミーの例に倣ってどうか学士院の1つの学術報告というものを版にすると云うことを此所で始めたらどうかと考えるのであります。(中略)或る会員が十分な価値あるものと認めた学術上の研究は、会員が十分な責任を持って学士院に提出いたしまして、(中略)日本の学問を代表する所の週報なり或は月報なりを発刊する手順を附けますれば大きに学術上の奨励にもなるとし、又日本の学問が学士院の指導に依って大いに発達して来ると云うことは、日本国のみならず外国に示すに良い機関になるだろうと思います。(下略)」この提案に対して櫻井錠二会員(化学)、三浦謹之助会員(医学)から賛成の発言があり、かつ、なるべくはやく実行したい旨の希望が述べられた。また長岡会員は、第1部(哲学及社会的諸学科)と同時に発刊すべきであるが、第1部の意向の如何にかかわらず第2部(理学及其応用諸学科)では必ず発刊したいとの発言があり、第2部から学士院の報告を発刊することが決定された。

その後、長岡半太郎会員らにより発刊の方法等が調査され、明治40(1907)年7月12日の總會において、出版に関する決議が行われた。その第二項には「論文報告講演等は帝国学士院紀事又は別冊として刊行することを得」と定められた。帝国学士院紀事(Proceedings of the Imperial Academy)の第1巻第1号は明治45(1912)年3月に刊行された。この号には学士院の歴史や法規、物故会員の追悼の辞などが掲載され、論文は掲載されなかった。大正2(1913)年に発行された第2号には例会の記事のほか、菊池大麓会員の論文「間重富の楯岡起原について(原題は英語)」が掲載された。同年に第3号、大正3(1914)年に第4号、大正7(1918)年に第5号と不定期に刊行され、以後は刊行が途絶えた。本誌が定期的に安定して刊行されるようになるのは大正15(1926)年のことであり、以後は現在のProceedings of the Japan Academyに至るまで、順調に刊行が続けられている。(文中、カタカナ表記は読みやすく変更しました。)

『学問の山なみ』から—歴史をつくった会員—

140年を超える学士院の歴史の中で、500名以上の会員が選ばれました。このコーナーでは、物故会員追悼の辞を集めた『学問の山なみ』から毎回2名を紹介します。

宮部 金吾 みやべ きんご

万延元（1860）年—昭和26（1951）年
昭和5（1930）年帝国学士院会員選定



江戸下谷御徒町生まれ。宮部家の開祖は豊臣秀吉時代の武将、宮部継潤である。幼少期は寺子屋、後に小学校の教育を受け、明治5（1872）年、横浜の高嶋学校に入学し、米宣教師から米国式の教育を受けた。明治7（1874）年、東京外国語学校、明治10（1877）年、北海道開拓使附属札幌農学校官費生を申し付けられ、札幌に赴いた。札幌農学校在学中の重大な事柄として、基督教への熱烈な信仰生活と植物学への真摯な学究生活の二つが挙げられる。札幌農学校入学当時、クラーク博士は既に任期を終え帰国していたが、博士の「イエスを信ずるものの誓約」に、内村鑑三、新渡戸稲造等と共に署名、この信仰は生涯を通じて変わらぬものであった。

宮部の広汎な功績で最も主なものは、北海道大学農学

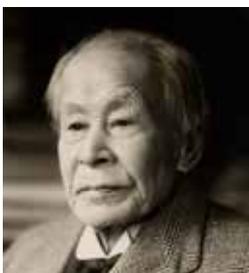
部に植物病理学講座を設置し、発展に尽力したことであり、日本の植物病理学者の大半は宮部の影響を受けている。なお、寄生菌を取り扱う関係で菌類の分類にも精通し、北海道植物誌、千島植物誌、樺太植物誌等を著し、日本北部の高等植物にも大きく貢献した。晩年には海藻特に昆布科植物の研究に没頭した。宮部の名を冠した植物種名は約30種、宮部が命名した種子植物は約60種に達する。

昭和7（1932）年には、米国ニューヨーク州イサカで開かれた国際植物学会議において名誉会長に推されるなど、宮部の功績は海外でも尊重されている。昭和12（1937）年には、宮中御講書始に東亜植物分布に関するエイサ・グレイ（米国の植物学者、宮部のハーバード大学時代の恩師）の学説を御進講し、昭和21（1946）年には文化勲章を授与された。

札幌農学校卒業後は札幌から離れることなく、生涯を厚い信仰と真理の探究に捧げ、遂には学者として最高の栄誉に浴した。昭和24（1949）年の札幌市創建80年に当たっては、名誉市民第一号の称号を贈られた。

牧野 富太郎 まきの とみたろう

文久2（1862）年—昭和32（1957）年
昭和25（1950）年日本学士院会員選定



高知県生まれ。早くに父母を亡くしたため小学校も中途退学し、正規の教育を受けなかったが、幼時より植物に興味を持ち、土佐を始め日本全国の植物を研究、上京して東京大学理学部植物学教室に出入りし、教授矢田部良吉博士、助教授松村任三、大久保三郎氏等に認められ、明治26（1893）年、東京帝国大学助手を拜命、明治45（1912）年に講師となり、昭和14（1939）年に辞任するまで研究と学生の指導に専心し、昭和2（1927）年には、理学博士の学位を得た。

牧野は、この間も盛んに野外採集を行い、採集品を検討、外国学者の所説を批判的に再評価し、独自の知見を加えて学界に発表を続け、半世紀以上に亘り本邦植物の

分類学的研究を継続し国産顕花植物の殆ど全部を再検討し新種として発表、精巧精緻な写生図と記載は海外から高い評価を得た。牧野の努力は、本邦植物の学名が、欧米の学者に質してから使用されていた習慣から日本の植物は日本の学者が研究命名する特権と義務を持つことを世界に認めさせた。同時に国内の大衆同好者を親しく指導して植物学の普及に大きく寄与した。

昭和8（1933）年、畢生の目的である日本植物図鑑の編纂に全力で取り組み、壮年時代に挫折を繰り返したが、晩年に至って牧野日本植物図鑑の刊行に漕ぎ着け、宿願を果たした。牧野は、私生活の困窮にも学問への強烈な熱意を失わず、多大な困難も克服して研究生活に没頭し、その成果は終に結実し、昭和25（1950）年、本院会員に選定され、同26（1951）年には文化功労者、同29（1954）年には従三位勲二等旭日重光章、更には文化勲章を受章する栄誉に浴した。

牧野は95歳という長寿に恵まれたが、最後まで植物への興味を失わず、その生涯の集大成の『牧野植物図鑑』は刊行以来、版を重ね、現在まで我が国植物学の金字塔で有り続けている。

会員・客員の逝去

平成30年10月以降、次の方々が逝去されました。

- 山川 民夫 会員 (第7分科、生化学専攻)
平成30年10月7日 享年96歳
- 西澤 潤一 会員 (第5分科、電子工学・通信工学専攻)
平成30年10月21日 享年92歳
- Ronald Philip Dore 客員 (イギリス、社会学専攻)
平成30年11月13日 享年93歳
- 向山 光昭 会員 (第4分科、有機合成化学専攻)
平成30年11月17日 享年91歳
- 伊藤 正男 会員 (第7分科、生理学・神経科学専攻)
平成30年12月18日 享年90歳
- 富永 健一 会員 (第1分科、社会学専攻)
平成31年2月23日 享年87歳
- Donald Keene 客員 (日本文学専攻)
平成31年2月24日 享年96歳
- 大澤 文夫 会員 (第4分科 生物物理学専攻)
平成31年3月4日 享年96歳

会員の近刊紹介

- ・久保田 淳 (監修) 『和歌文学大系 50 物語二百番歌合／風葉和歌集』明治書院、平成31年1月
- ・吉川 忠夫 『顔真卿伝 時事はただ天のみぞ知る』法藏館、平成31年1月
- ・佐藤 彰一 『宣教のヨーロッパ 大航海時代のイエズス会と托鉢修道会』中公新書、平成30年11月
- ・揖斐 高 『蕪村 故郷を喪失した「仮名書きの詩人」』笠間書院、平成31年1月
- ・西尾 勝 『国会の立法権と地方自治 憲法・地方自治法・自治基本条例 (北海道自治研ブックレット)』公人の友社、平成30年9月
- ・村松 岐夫 『政と官の五十年』第一法規、平成30年12月
- ・瀬川 信久 (他編) 『民事責任法のフロンティア』有斐閣、平成31年3月
- ・野中 郁次郎, 山口 一郎 『直観の経営「共感の哲学」で読み解く動態経営論』KADOKAWA、平成31年3月
- ・内田 祥哉 『ディテールで語る建築』彰国社、平成30年11月
- ・本庶 佑 『生命科学の未来 がん免疫治療と獲得免疫』藤原書店、平成30年12月
- ・NHKスペシャル「人体」取材班編 『山中伸弥人体を語る NHKスペシャル『人体』』小学館、平成31年1月

編集後記

第23号ニュースレターでは、平成31年度日本学士院賞受賞者及び新会員と新客員の紹介、第15回学術奨励賞受賞者からの寄稿、会員寄稿のほか、講演会レポートなどを掲載しています。ご寄稿いただきました先生方には心より御礼申し上げます。

また、昨年10月には、第13回日韓学術フォーラムが東京で開催され、韓国から総勢15名の先生方をお迎えし、研究発表と活発な議論が行われました。院長を始めスタッフや関係各位のご準備・ご協力のお陰で滞りなく終えることができましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。

さらに、昨秋、本庶佑会員がノーベル生理学・医学賞を受賞されました。誠におめでとうございます。本庶会員の長年の研究により、がん治療に新たな道が開かれ、実用化されていることはご案内のとおりです。

さて、「平成」という時代が間もなく終わります。「平成最後の・・・」という言葉をよく耳にしますが、今号が平成最後の日本学士院ニュースレターということになりますので、日本学士院賞の「平成」を振り返ってみます。平成元年の第79回授賞式から平成30年の第108回授賞式まで、30回の授賞式が行われ、269件の研究業績に学士院賞を授与し、その内47件には重ねて恩賜賞を授与いたしました。これら受賞された研究業績からは、後にノーベル賞受賞へ繋がる研究も数多くありました。

最後に、日本学士院では毎年、一般の方々を対象とした「公開講演会」を開催しております。今春は、金沢大学との共催で、金沢市での開催となります(P.11)。皆様のご参加をお待ちしております。また、新しい時代も引き続きニュースレターを刊行して参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。(H)

※受賞者、新会員の肩書きは、発表当時のもの。

◎お問合せ先

日本学士院

〒110-0007 東京都台東区上野公園7-32

電話：(03)3822-2101

FAX：(03)3822-2105

E-mail：gkjinu@mext.go.jp

第23号：発行日：平成31年4月26日

(年2回 4月、10月発行)

ホームページもご覧ください。

<http://www.japan-acad.go.jp/>